

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579
E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321
編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

98号

出会いとつながり

今の社会には「生きづらくさせられている」方々が多く存在しています。その生きづらさは、社会がそのような方々に対して無関心であることや、理解がないことが要因のひとつではないかと思えます。今号では、そのような方々との「出会い」によって気づかされた「地域でのつながり」の大切さをお伝えできればと願い編集いたしました。社会が変わっていくために、地道な働きが求められていることを共に再確認していただきたいと思えます。みなさまのご感想をお待ちしています。(平田)

■熊本震災支援から見えてきたもの

イエス団では、4月に起きた熊本地震発生後、救援対策本部を立ち上げ、様々な支援活動が続けてまいりました。今号では、西原村にある障がい者通所支援施設のたんぽぽハウスでの支援活動に参加したメンバーに集まってもらい、座談会を行いました。それぞれの思いが込められております。是非ご一読ください。

平田:それぞれ、初めて熊本に入ったときはどんな感じでした?

馬嶋:GW明けの5月9日に熊本に行きました。そこは、支援物資も訪問する人も「断らない」ことをモットーにしているのので、大勢の人が押しかけてきている状況で「ドタバタ」している感じでした。ちょうど利用者の通所が再開された時期でもあったので余計にそう感じたんやと思えます。

佐藤:ぼくは、馬嶋くんの後に6月から支援に入ったんやけど、馬嶋くんが現地の人と関係性を築いてくれたおかげで、比較的スムーズに支援に入れたかな。このような支援では「最初」が非常に大事なんで、助かりました。

田中:毎日送られてくる現地での活動報告のメールを読んでいて、早く行きたい気持ちがあったんやけど、実際に行ってみて、とにかく忙しかったです。「自分のできることは何やろう?」と考えて動くことの連続でしたわ。その中で「何か役に立てたらいいな」という気持ちが日に日に強くなってたかな。

平田:西原村やたんぽぽハウスの周囲の状況はどない?

田中:たんぽぽハウスの通所者の送迎の際に見た村の集落、特に壊滅的な被害を受けていた山間部の小さな集落の状況は衝撃的やった。

佐藤:ぼくも、まるで巨人が踏みつぶしたかのような家屋の潰れ方にショックを受けたね。余震も、速報の数字以上の揺れを感じ、正直恐かったです。

平田:たんぽぽハウスの職員の家も倒壊したんやね。

馬嶋:現在でも完全に住めない状況ですね。その集落に住んでおられた方の大半の方は地域の外に移っていますね。

平田:被災者でもあるはずのたんぽぽハウスが積極的に被災者支援を行ってきたようやけど...

馬嶋:震災前から、たんぽぽハウスは地域向けにラーメン食堂やこども食堂を開設してはあったみたいですね。震災後はたんぽぽハウスの向かいが避難所となっていたので、そこに避難しておられる方々への炊き出しから始まり、炊き出しが終了した後も、「絆食堂」として毎日温かい食事の提供を行ってはりました。毎日、被災された方だけでなく、ボランティアで来られている方など、多くの方が利用されてましたわ。それだけ、地域の人もたんぽぽハウスを必要としてはったことを肌で感じましたね。

佐藤:食堂で提供する食数も震災前から倍近く増えているって言うてはりましたね。

馬嶋:全国から支援物資で様々な食材が届いたので「絆食堂」のメニューも増えていきましたね。食事作りを手伝ってくれる人も大勢応援に来てくれてました。また、震災直後から、自宅から出られない人のために配食も始めはりました。

平田:すごいね。

田中：たんぽぽハウスの建物も被害を受け、職員も被災しているんやけどね。

平田：たんぽぽハウスの活動を中心に、色々な人がつながった。それは「(被災者に)喜んでもらいたい」「元気づけてい」という強い気持ちがあったのだと思う。

馬嶋：震災直後、たんぽぽハウスの施設長は事業所の玄関で寝泊まりしてはったそうです。家がつぶれて自宅に戻れない通所者の人も受け入れてはりました。

平田：たんぽぽハウスとして、震災支援はいつまでやり続けるんやろうね？

馬嶋：ずっと続くと思うわ。自分たちの活動に対して「させられている」感覚は全くない方々ですから。必要とされている人たちがいるかぎりやり続けはると思うわ。

平田：そうなんや！ほんますごいね！ところで、西原村にも仮設住宅ができたらしいね。

馬嶋：たんぽぽハウスの近くに、300戸の仮設住宅が木造とプレハブの2種類の住宅が建ってます。けど、やっぱり障がいのある人には住みにくいみたい。避難所で出会った車いすを使って生活されている方の仮設住宅は、玄関からは入ることができずに、裏のサッシから出入りしてはりますし、部屋のトイレも使えないので、別棟にある障がい者用トイレを毎回借りてはる状況みたいです。入居当初は近所のコンビニまでトイレを借りに行かれました。

平田：そうなんや。これまでの震災の教訓が生かされてないね。

馬嶋：また、農作業をしていた高齢者は仮設住宅に移っても「何もすることがない」状況になってるけど、小豆の選別や柚子こしょう作成などの、たんぽぽハウスの軽作業に参加してもらったりしてますわ。

平田：現地に行って気づかされたことはどんなことかな？

田中：地域とのつながりが「すごい！」と思った。

佐藤：たんぽぽハウスのある地域では、震災直後の安否確認も的確だったみたい。たんぽぽハウスの利用者でなくても、職員は「あの集落にひとり暮らしの高齢者がいる」など、要介護者を把握してはったみたい。

馬嶋：今回の支援で東日本大震災支援に行った事業所の方ともたんぽぽハウスで再会しました。また、地元のお祭りに東北の事業所も招かれており、被災地同士の交流も積極的にやってはりました。

平田：そのようなつながりは、震災前からの取り組みがあってこそやわなあ。

馬嶋：さっきお話しした仮設に移ったSさんという障がいのある方との出会いに、いろん

なことを考えさせられたなあ。Sさんはたんぽぽハウスの近くに住んではって、車いすを使用しているけど、福祉サービスは利用してこなかった方やったみたい。だから直接的にはたんぽぽハウスとは関係なかったんやけど、家が全壊で避難所で生活されたはった時に、お話しさせてもらうようになったん。ぼくの支援が休みの時に、温泉にも一緒に行かせてもらって、すごく貴重な時間を過ごすことができたん。元々人間関係に積極的でなかった方やったようなんやけど、今や新聞などの取材に対して、自分の言葉で震災の状況などを語り始めてはりますわ。

平田：Sさんは出会いによって、Sさん自身の持っている力が高められたように感じる。震災によって新たなつながりが生まれ、現地に行った人間も世界観が広がることを実感した。

平田：被災地支援の経験を今後どのように活かしていく？

田中：たんぽぽハウスのように、愛隣館も地域とつながることが大事なんやと思った。つながりを「つくろう」とするのではなく、自然と人が集まるような形が望ましいんやけど。

佐藤：いかに日頃から地域のイベントにフットワークよく動けるかが鍵なのは。京都文教大学マイタウンMJや学区社協とか。まずは障がいのある方と地域住民との出会いの場の「ふれあいサロン」が盛り上がりたなあ。

馬嶋：まだまだ「元の生活」に戻れない人がたくさんいる。自分にとって近い存在を亡くした人もいる。心に深い傷を抱えたままの生活が今も続いていることを忘れてアキャンし、被災地に行った人間としては、そのことを伝え続けていかないと。また、利用者や地域の人に対する実質的な支援だけでなく、「震災後のケア」は愛隣館にも求められると思う。たんぽぽハウスの活動に参加して、その必要性も強く感じた。

田中：愛隣館だからこそできることは必ずある。仮に十分な体制がとれなくても、普段から大切にしている理念は引き継がれていくと思う。(聞き取り：出口剛史)

<座談会を終えて>

地域には当たり前のように生きづらさを抱えている人がいます。いわゆる制度の枠組みの外にいる人はつながりにくい現状があります。いかに日頃の「出会い」を大切にし、お互いに「つながる」ことができるのだろうか。いざ非常時になれば、そのような人たちがいることに想いをよせることが大切だとあらためて考えさせられました。西原村での出会いとつながりに感謝です。(平田義)

■フレフレ「ふれあいサロン」

あたたかな湯気が立ち、ポコポコと気持ちをちょっと陽気にさせる音…。

「コーヒーいかがですか?」

少し遠慮がちに、そしてやさしさたっぷりの声が聞こえます。

ここは、向島ニュータウンセンター商店街にある『マイタウンMJ』※

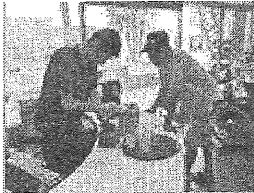
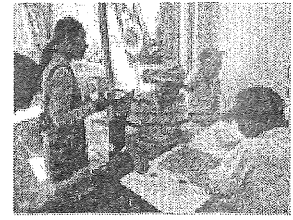
毎月第2水曜の13:00~14:00にのみ現れる幻のサロン(2016年12月現在)、

それが『ふれあいサロン』

そこには、コーヒーを淹れる姉さんがいます。兄さんもいます。

誰が来てもOKで、それぞれの時間を過ごしてもらえればいいのです。

美味しいコーヒーの振る舞いがあります。



向島がもっとワクワクする場所になるには何が必要だろう?

気軽にコーヒーが飲めて、地域の人が集まってワイワイとおしゃべりやらできる

時間と場所があれば!と、ひらめいたのがこの『ふれあいサロン』

サロンを始めようとした時に、この姉さんと兄さんが「やりたい!」って言ってくれたのです。

いつもは家にこもりがちだったり、外ではうまくおしゃべりできないシャイな人たちなのですが、この時はとても積極的で、目を輝かせてました。

毎日するのはすごく疲れるし、根気がいるし…って、ちょっと自信のなさもあったりして。

なので今は月1回だけ。だけでもこの日だけは、ほんと精一杯振る舞いをする姉さん、兄さん。

かっこいいので是非会いに来てほしいのです。

最近、よもやま話や井戸端会議する場所(素敵な恋人との出会いの場も)や時間ってなくなったな~と感じるのです。

なにげない、柔らかな場所や時間から生まれる安心感やワクワク感ってあるはず!

そんなモノを『ふれあいサロン』では大切に紡ぎだし、あたたためて、広めてゆければな~とと思っています。

きっと姉さんや兄さんもそれを感じたところもあって、「やりたい!」って言ってくれたのかな。

そんなこと、口に出さない人たちなので決めつけてはいけません(笑)

一度、来てください♪そして、ゆっくりとそれぞれの時間をすごしてもらえればと思います。

※『マイタウンMJ』2013年1月向島ニュータウンセンター商店街にオープン、87号参照

■まずは「知る」こと ~「モデル民協」の集いを通して~

自分の理解や想定を超えた違いに出会うと、距離を置こうとするのが自然の成り行きかもしれませんが、ただ、置いた距離を放置すれば、嫌な感情が伴ったり、誤った思い込みにつながったりすることもあります。心地よい人間関係をつくるための秘訣は、「知る」ことにあるのではないかと。12/4(日)に開催された地域の交流会「モデル民協」を通じて、改めて感じました。

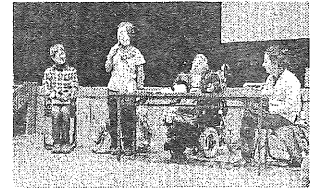
「え!?!となりのとなりは…〇〇名人」と題し、二ノ丸民生児童委員協議会と「あいりん」で開催した交流会には、子どもたちも含めて、なんと80名以上の地域住民が集まってくださいました。お題に対して、グループの中で該当者を探し、お互いを知る目的のゲーム「人間ビンゴ」を実施。共通点で盛り上がり、意外な一面の持ち主には興味関心の視線が注がれました。バイクのフィギュア収集が趣味の方、「向島駅にエレベーターが設置されたのは僕のおかげ」と豪語する方、「向島まちづくり憲章」について熱く語る方、30年以上向島ニュータウンに住んでいる方。ここでは紹介しきれないほど個性ステキな方々です。拍手と笑いと驚きに包まれ、人と人が近づく時間になったと思います。

発表者のみなさま→

一方、この会では身体障がいや視覚障がいのある方から話をうかがう時間も設けました。普段車いすを使って電車を利用している方が、ひとりの乗客に通路を妨害された体験を話して下さいました。「おまえは電車に乗るな、と言われていたようで、その乗客の眼差しが今でもちらつく」という言葉に、「共生」とは相容れない実態も浮き彫りになりました。

ちょうど10/27(木)は、二ノ丸民生児童委員協議会で2016年4月から施行された障害者差別解消法に関連する研修会がありました。誰もが暮らしやすい地域づくりは、様々な境遇や特性を含めて「あ、こんな人も地域に居るんだ」という顔の見える関係から始まることを共有しました。

「相手のことを知るためには、まず自分をさらけ出すこと」。私がある福祉施設で実習を終えた際、実習担当者から贈られた言葉です。相手のことを知るためには、「教えてもらう」という控えめで素直な好奇心が必要な場面もあります。同時に、自分のことを「知ってもらう」努力や工夫も欠かせません。12年前のアドバイス(警告?)が実践できているか我が身を顧みつつ、今日も知り合う機会を大切にします。(出口剛史)



■YMCA・YWCA合同祈禱週に参加して

鳥井新平(近江兄弟社小学校)

2016年11月12日、YMCA・YWCA合同祈禱週に行って来ました。会場は地下鉄丸太町駅おりて徒歩五分のYWCAやのに、間違えて御池でおりて三条柳の馬場のYMCAに行きそうになった。あぶないあぶない。MとWでは大違い。これ、性の多様性に即して、合同してゆくゆくはP(Person)になるのかしら？講師の平田義さんとは、もう30年来の友人。「誰もおきざりにされない-相模原でおこった障がい者殺人事件を受けて-」という彼の話が聞きたかったのです。講演の前に用意していただいた軽食(のわりには、しっかりとしたコロッケや美味しいスープ。堂々とした夕食。キョロキョロとワインを捜すが、それはなし。てへへ)グループごとに小テーブルでまずは、お食事。もう一人の講師の村田恵子さんを平田さんから紹介していただく。食事をしながらも、沖縄の高江の状況について、基地問題とヤマトで暮らす私たちの関係と熱心に議論する。

そしていよいよ講演の時間。一番バッテリーは我らが平田義！30分という限定された時間内で熱く深く語っていただいた。24時間完全介護を必要とされる柏木正行さんとの出会いの話から始まり、医療的ケアを必要とするK.K.Kんの受け入れの経緯。優生思想の中で戦争中抹殺を軍から指示された伊江島の脳性麻痺の木村浩子さんの話…。平田さんの話は出会いの中から、受け止めた障がい者のリアルな命の物語に満ちていました。糸賀一雄さんの「この子らを世の光に」の言葉をひきながら多様な命の在り方の大切さを訴えてくれました。続く二番手は村田恵子さん。村田さんは頸髄損傷による中途障がい者として電動車椅子に乗っておられます。特定非営利活動法人 京都頸髄損傷者連絡会の会長として、いろいろな方の相談業務に当たられています。村田さんは平易な言葉を使いながら、障がい者の中でもとりわけ女性達の置かれている、驚くべき差別的な状況とそれを打開すべき取り組みについて大変分かりやすくお話してくださいました。障がいのある女性の強制的避妊手術、女性の障がい者の入浴介助の時に男性看護師が入ってくる現実…。「私たちのことは私たち当事者ぬきでは決めないで！」という主張につらぬかれていました。障がいは、その人の特徴であり財産である、障がいは不幸ではなく不自由だ、との言葉が心に残りました。

講演後は、グループに分かれて少人数での話し合いの時間がもたれました。せっかくJRと地下鉄に乗って滋賀県からやってきたので、聞きたかった質問をお二人の講師にぶつけてみました。

Q: 村田さん、誰も置きざりにされない社会にむかって、社会を変えていくコツは何ですか？

A: まず、当事者が伝えていくことだと思います。知ってもらう努力を続けることです。そして、自分にわからない障がいをもたれた方に出会った時には、聞いてください。わからないことは何度でも聞いてください。途中でではしられると、とても淋しい思いになります。障がい者は、朝起きた時から努力して生きているのです。

Q: 平田さん、重い障がいをもった方々のサポート業務を中心に置きながらも、他に沖縄・アジア・在日…と多様な人権に関する事柄に取り組んでおられますが、それぞれの取り組みの関係性や今後の方向についてどのように考えておられますか？

A: 障がい者も地域の中で生きています。社会の中で生きています。すべての問題はつながっています。平和でなければ、福祉はできません。相模原のあの事件の犯人に対しても誰が、どのような関わりをもっていたのかがとても大事だと思います。誰が彼に関心を持っていたのでしょうか？置き去りにされがちな人がいることを、社会の側に訴えかけていく努力がこれからはさらに求められていると思います。条例や制度には美辞麗句が並びますが、誰も置き去りにされない社会をつくりだしていくために、声なき声にも耳を傾けていかなければなりません。

お二人の貴重な講演を元に、弱さでつながる社会と多様性を喜びとしあえる社会の創造に向けて、心の底から新しくされていく時間でした。

2016年 クリスマス献金のお願い

皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けられますこと、心より感謝します。今年度もクリスマス献金にご協力頂きますよう、お願いを申し上げます。

《クリスマス献金・要項》

目的：障がい児・者とその家族とが地域で安心して暮らすことができる為に愛隣館研修センターの今後の活動を支援する

目標金額：3,000,000円

郵便振替：01020-5-39321

口座名：社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

★お知らせ★

▽愛隣館研修センターは、12/30-1/3まで休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▽98号のご意見ご感想お聴かせ下さい。(さ)

▽高江のオスプレイパッドの建設が強行されている▽辺野古の新基地建設も中断していたが再開されようとしている▽沖縄の基地負担軽減を推し進めるといふ政府のやっていることだ▽原発避難者への住宅無償支援も打ち切れようとしている▽これも「復興」を声高に叫んでいる政府が行っているのだ▽今年のこの時期に、2015年は酷い年だったと書いた▽2016年も酷い年だった▽このフレーズは今年で最後にしたい (ひ)